

Memento

部落史研究の現在と学校教科書

灘本昌久

はじめに

最近の部落史研究の動向を反映して、小中学校社会科教科書の部落史の叙述も大きく変わってきた。ひとことで言うと、近世政治起源説をすてて中世起源説をとるようになり、賤民と称された人たちがいかに差別迫害されてきたかという陰の部分に焦点をあてる傾向から、いかにプラスの社会的役割を果たしてきたかという光の部分に焦点をあてる叙述に変わってきている。

旧来の「暗黒の部落史」は、同和事業を獲得するときのアジテーションではありえても、部落差別意識にメスを入れ解消するという点では、逆効果の面が多いので、こうした見直しは歓迎すべきことと考える。ただ、新しく出てきた教科書をいくつか見てみると、史実誤認や不十分なところ、また古い枠組みをひきずっている点が散見されるので、本編では部落史研究の立場からそうした問題点を指摘することにする。なお、教科書は研究の定説をもとに叙述するものであり、研究の最前線を追いかけてまわす性質のものではない。ここで指摘する意味は、教科書の書き換えや授業内容の改善を直接要求するものではなく、あくまで、参考に供するというふうにご了解いただきたい。

部落史学習の位置付け

ところで、本論に入る前に、果たして小中学校で部落史学習は必要かという根本問題を考えておかななくてはならない。部落史学習に限らないが、不用意な人権学習というものは、差別の解消どころか拡大再生産に手を貸すことになりかねないので、注意が必要である。たとえば、最近、私の友人からこんな経験談を聞いた。家に帰って

きた小学5年生の子どもがいうことには、「お母さん、ぼく42という数字嫌いや...」。お母さんが理由を問いただしてみると、小学校で和太鼓演奏の実演があった。そして、それに関連して、太鼓には部落産業という背景があり、穢れにたいする差別につながる問題がある。またそれらは現代でも「4」や「9」という数字を忌避する日本の迷信ともかかわり...という説明を先生がした。それを聞いて帰ってきた子どもが、上記の感想をもらしたというのである。何も触れなければ、素直に和太鼓の演奏を聞いたものが、先生の説明によって、いらぬマイナスイメージを付け加えたことになったかもしれない。もちろん、この一例をもって、人権学習の必要を否定するものではないが、子どもがどの年齢までは感覚的な理解をし、どの年齢以上であれば理屈で理解するのは、考慮すべきことだろう。やればいよいよというものではない。大学生くらいになると、そういう気遣いは比較的無用で、徹底的に中身を深めていけばいいのだけれど、年齢が低い場合はそうもいかない。私の素朴な実感からいくと、小学生に中世起源の部落史学習が可能かどうか、あるいは必要があるかどうかは疑問で、中学生でも、ちょっとむづかしい感じを受ける。このあたりは、今後議論していきたいところである。

民衆史の一部として

部落問題を日本史授業の中でとりあげる場合、二つのアプローチがあると思う。ひとつは、今までなされてきた部落問題学習の一環としての部落史学習である。つまり、今に残る部落差別がどうして成立して、どのように現在に至るかを学習し、部落差別解消に役立てようという立場である。この場合は、古代賤民制の崩壊から説き

起こして、中世賤民集団の成立と室町文化とのかかわり、江戸時代における身分制の確立と、幕末の身分統制政策、解放令という順序でその移り変わりを説明することになる。

もうひとつは、民衆史的アプローチである。これは、歴史を動かしてきたのは、ひとにぎりの権力者ではなく、名も無き民衆であるという考えだ。先生「大阪城を造ったのは？」生徒「大工さん！」というのは冗談にしても、その時々を歴史を作ってきたのは、指導的な立場、権力の立場にいた人の貢献もさることながら、現場の職人芸が大きな役割を果たしているのは、決して昔だけのことではない。さきごろノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊東大名誉教授の仕事にも、無数の部品メーカーの職人芸が生きているのは、同じことである。

この二つのアプローチのどちらをとるかで、部落史学習の語り口は相当変わってくる。前者の場合は、概略以下のような流れの話となる。古代末から中世にかけて、一般農民の共同体からはじき出され、あるいは脱落・流出し、中世非人（社会外の社会）となった人びとが、宿・声聞師・河原者などの賤民集団を形成し、河原者はケガレの処理を中心とする職能集団として、さまざまな仕事を担う。そして、動物の死骸などケガレの処理は、本来、河原などに埋めてしまえばこと足りのだが、病弱になって働けなくなった耕作用の牛馬は、単に飼いつくすわけにもいかず、その屠殺も河原者の仕事である。こうしてできた動物の死骸から様々な物を作る化製業系の仕事が発生する。皮革の製造はいうに及ばず、接着剤としての膠や漢方薬である牛黄など、さまざまなものを工夫して製造した。戦国大名が、城下町築造の際に、自分の出身地から皮多を引き連れて来て優遇したのは、こうした特殊技能を重視してのことである。また、犯罪の取り締まりや処罰も、ケガレの処理の一形態で、古くから河原者もたずさわっていた。近代になっても、各地の部落に十手や御用提灯が保存されていたのは、そうしたことに由来する。また、ケガレの処理から発展したものに、権門の住居のトータルコーディネーターという役割もある。本来は、庭を清浄に保つのがケガレ処理の本義であろうが、徐々に土木技術や作庭技術・理論を発展させていった。また、警察業務との関連もあるが、庭者の陰の任務として、諜報活動も重要な仕事であった。こうしたケガレ処理関連の仕事とは別に、河原者たちは嘗々と農地の開墾・耕作に努力し、江戸時代に入ってから、一

般の百姓とかなり近い存在となっている。江戸時代の中期以降は、町人文化の発展に連動して、製造業、とりわけ雪踏の裏張りの原料である皮革を独占的に製造していた関係で、履物関連産業が一挙に開花・発展して、皮多村の経済が飛躍的發展をとげる。また、動物の屠殺や化製業に関する知識、および処刑などの刑吏役から来る人体に関する知識が発展して、医療技術にたけた穢多身分の人が輩出される。1777年（安永6）、武州榛沢郡新戒村の穢多が「医道巧者」なので、もっと活躍してもらおうとの世論が高まり、村や近郷の人々あげての身分引き上げ嘆願運動があったことは、あまりに有名である。また、1771年（明和8）の小塚原で杉田玄白らに人体解剖をしてみせたのが、刑場で働く穢多の虎松のお祖父さんであった（平成14年度版の小学校6年生用教科書 東京書籍）。また、京都府蓮台野村の益井元右衛門は眼病院を設立して、相当高度の外科手術をし、果ては部落の子どもたちにドイツ語まで教えていた（灘本昌久「明治期京都における被差別部落の義務教育について」『京都部落史研究所紀要』3, 1983年）。他にも多くの地域で被差別部落から名医が多く出ているが、これらは斃牛馬処理や刑吏役と強い結びつきを想起させる。

以上は、部落問題の理解をはかるという意味からの部落史の骨組みであるが、もうひとつの民衆史的アプローチから被差別部落の歴史を位置付ければどうなるだろうか。この場合は、部落問題の系譜的、系統的的理解にこだわらなくても、時々の下層民、賤民、被差別民の社会に対する貢献として、様々なエピソードをとりあげればよいことである。「時々生活の改善や、文化の発展には、さまざまな階層の人々が努力し、貢献しました」と。そして、室町文化における庭造りや、『解体新書』のための人体解剖など、比較的プラス・イメージの強い上澄みのところを積極的にとりあげていけばいいわけである。この場合、特にキヨメ 河原者 皮多 穢多 同和地区民の系譜的連続性にこだわる必要はなく、他の職人や賤民の貢献と並列してとりあげることができる。

もちろん部落史がこの二種類にすっきりと色分けされるわけではないし、またどちらが好ましいと結論付けるつもりもない。ただ、冒頭述べた例でわかるように、小学生にあまり前者の系統的部落史を教えると、どんな誤解をしたり否定的イメージが刷り込まれるかわからないので、注意を喚起しておきたい。教える側の力量を相当問われるし、ある種の気迫もいる。中途

半端には教えにくいのである。ただ、逆に部落差別の理解という点では、民衆史的アプローチでばらばらのエピソードを教えたぐらいでは、なかなか差別の問題が心の底からわかったという具合にはなりにくいという欠点もある。

現在を過去に投影する誤り

次に、部落史学習の中で、陥りやすい誤りについて指摘しておきたい。それは、現在の価値観や経験を過去に投影してしまうということである。次のようなことがあった。20年以上前の話であるが、京都に遠方から修学旅行でやってくるために、先生が下見に来られた。同和教育に熱心な学校だったのか、同和問題学習を取り入れたいというのである。そして、こちらが京都の部落に関する説明をし、キヨメ役の解説をしたところ、「掃除などという人の嫌がる仕事を押し付けられていたのですね」という反応だった。京都の穢多村が担当していた、小法師役（御所のキヨメ）、二条城掃除役などは、決して押し付けられていた訳ではなく、どちらかという本誌前号で述べたように、他の賤民集団から奪い取ってでもやりたい仕事であって、穢多村の活券こけんにもかかわる重要なことなのである。昔、学校では「罰掃除」というのがあったので、そうしたことから、「掃除＝させられる」という連想が働くのかもしれないが、部落史の理解としてはありがたくない反応である。

これとは逆に、今の職業ステイタスで高いものを過去の賤民の歴史から拾い出そうという傾向もある。先ほどの医療と穢多身分の関係などが典型的であるが、成績の良い子は医学部に行かせる現在の価値観を過去に投影して、「穢多身分の仕事は、人に嫌われることばかりではなく、医学にかかわる仕事にも従事しました」という教え方は、欺瞞的といえよう。前述のように、穢多身分と医学のかかわりは、「皮はぎ」「首切り役人」との密接なかかわりから出てきているものである。そんなことを小さい子どもに教える必要はないが、教える側は踏まえておく必要があるし、大学生くらいなら、理解可能なことである。蛇足かもしれないが、「首切り役人」が医療技術にたけているのは、日本に限ったことではない。阿部謹也氏は『刑吏の社会史』（中央公論社、1978年）の中で中世ドイツにおける刑吏と医学について次のように指摘している。「中世において人体解剖は禁じられていたし宗教的制約が大きかったが、拷問や処刑を実施した刑吏は自ら

生体解剖を行ない医学の最先端に立っていたのである。…人々は大学を出た医者よりも刑吏の治療の方を信用していた。…大学を出た医者は人体解剖することを許されていなかったからである」（132頁）。そして、ドイツでも刑吏と「皮剥ぎ」の関連が見出されるそうなのだから、人間のやることはよく似ている訳である。更に、ドイツ語にいう「angstmann」という苗字が「死刑執行人」という意味であることと、穢多の総大将「弾左衛門」という呼び名は「断罪」に由来するものではないかという推測を重ね合わせると、ますますもって興味は尽きないのである。

芸能と賤民

以上は、大枠の話であるが、以下で、教科書に散見される史実誤認や誤解と思われる点をいくつか列記しておきたい。

本誌8号に、私はうかつにも「竜安寺石庭を築造した庭者」という表現を使った。また、同様の表現をしている教科書も多くあるが、実は、竜安寺の石庭を河原者（庭者）が作ったという証拠はない。竜安寺石庭の庭石に刻んである名前が河原者ではなかろうかという、希望的観測があるだけである。また、銀閣寺も河原者によって作られたという確たる証拠はなく、善阿弥という庭造りで名を成した河原者を重用した足利義政が、善阿弥の死後、銀閣寺（東山山荘）を造営し、庭木の選定や収集に河原者を使っていたので、ひょっとすると庭のコーディネイト全体を河原者にまかせたのではないかと推測はなりたつが、史料上確たる証拠はない。善阿弥が生きていたら銀閣寺の庭造りを彼にまかせたことはまず間違いないだろうが、善阿弥の死後作られた銀閣寺の庭園の作者はわからない。河原者が作ったことが確実なのは、むしろ禁裏（御所の内裏）のほうだ。これは、1474年（文明6）あたりから、『言国卿記』などにたびたび出てくる（『京都の部落史』第3巻555頁など）。

また、室町文化のところで、河原者の庭作りとならんで登場するのが、観阿弥・世阿弥の能であるが、これを賤民芸の一種と見る傾向がある。しかし、芸能史研究家の山路興造氏によれば、能は古代以来の猿楽の系譜を引くプロの芸能集団に属するものであり、室町時代以降声聞師など賤民集団が演じた千秋万歳にみられる祝福芸とは別系統の芸能である（『翁の座』平凡社、1990年17頁～、『京都の部落史』第1巻115頁～）。能と庭造りを並列して、中世賤民の文化への貢献とひ

とくくりにするわけにはいかない。

政治利用論

能のことは、まだ目をつぶるとして、江戸時代初頭の身分制の確立のところで、多くの教科書が、「穢多・非人身分=分裂支配の道具論」を採用していることにはびっくりさせられる。武士に向かう農民の不満を下に向けさせるという論理なのだが、江戸時代の幕藩体制の成立と身分制の確立を罪悪視するところからくる誤解だろう。もうすこし、戦国の動乱を終わらせ、二百数十年の平和と安定をもたらした江戸時代、そしてその基礎をなした身分制を積極的に評価するべきである。下剋上を終わらせた（下剋上自体は、農民の上へのしかかっていた重層的な所領関係を一扫し、領主領民のシンプルな関係にした点でプラスであるが）ことは、多くの庶民にとっても福音であったはずで、であればこそ、江戸時代にあれだけの経済・教育・文化などさまざまな面での素晴らしい発展があったのである（梅棹忠夫『日本とは何か 近代日本文明の形成と発展』日本放送出版協会、1986年）。江戸時代の初めに、身分制度の確立のため締め付けられたのは、第一には諸大名であったし、武士も身分制度の枠をがっちりとはめられた。マルクス主義的な階級闘争史観を克服するためにという触れ込みで編纂されたはずの扶桑社版の教科書までが「百姓や町人に自分たちとは別の恵まれない者がいると思わせ、不満をそらせることになったといわれる」という具合に、ばりばりの「政治支配の道具論」を採用していることには苦笑させられる。

こうした誤解と連動して、江戸の後半に起こってくる穢多身分に対する風俗統制にも大きな誤解がある。多くの教科書が「長年差別に苦しんできた穢多身分の人々が、江戸の終わりころについに立ち上がった」、あるいは、「財政難に陥った藩が、儉約を命じ、穢多身分の風俗を統制した」という趣旨のことを書いているが、むしろ、江戸時代の平和と安定の中で、商品経済が発展し、町人向けの履物製造業が繁盛するなどの追い風を受けた穢多身分が、百姓身分を凌駕するまでに成長してきたので、旧体制である幕府や藩は、古い殻に閉じ込めようとして、風俗統制を強化したのである。穢多身分の経済発展と人口の増加があれば、風俗統制のために必死になる必要はなかった。

解放令 = 空手形論

近代の部落史の部分で気になるところは、多くの教科書が、「解放令 = 空手形論」を採用していることである。「形式的には平等になったが、それまでの特権（斃牛馬処理、免税）が廃止され、仕事の保証など政府からの援助がなかったので、かえって貧困化した」という書き方である。しかし、江戸時代後半からの穢多村の経済発展は、明治時代に入ってからも続いている。京都の中心的部落である崇仁地区の記録である『柳原町史』によれば、「安政以来漸次隆盛の域に進み、慶応より明治六、七年迄は其極度とも云ふべき有様」であったという。解放令の出された明治四年は、まだピークの前の上り坂である。したがって、成立して間もない貧乏革命政権が、解放された穢多村に経済援助をする理由はまったくなく、またその必要もなかったのである。

重要なことは、部落の貧困化は差別問題とはまったく別のところからやってきたことにある。それが、松方デフレ政策にほかならない。1877年（明治10）に勃発した西南戦争で、明治政府は最強のプロ戦闘集団である薩摩武士を相手に多額の軍費を使い、不換紙幣を乱発したために、悪性のインフレに見舞われた。その解決のために、松方正義大蔵卿が急激な紙幣整理というハードランディング方式をとったために、一挙にデフレになり、部落の製造業が壊滅的打撃を受けたのである。決して、部落が狙い撃ちされて被害をこうむったわけではなく、また差別されて貧乏になったわけでもない。解放令は、江戸時代の解放論が抜擢解放（行ないが良かったり、社会に功績のあった者から順に身分を引き上げる）とい漸進的方式であったのに対して、明治政府の出した解放令は即時無条件全面解放という画期的なものであり、明治政府が青臭いまでに革命的であったことを物語っている。部落の貧困化は、そうした解放令とはまったく時期も原因もことなることにより引き起こされたのである。

おわりに

以上、最近の歴史教科書に見られる部落史の問題点を羅列的に指摘したにすぎない。今後、旧来の部落史の全面的見直しと批判をしなければ完結しないのであるが、とても私の能力の及ぶところではない。今後、少しでも勉強を続けて、その一部なりとも責を果たしたいと思っている。

（なだもと まさひさ / 京都部落問題研究資料センター所長）

『京都の部落史』史料を読む 第4回

芸能を楽しむ

中島智枝子

はじめに

古典芸能を代表する歌舞伎であるが、今日では劇場へ出かけて観劇することはあっても、愛好者が歌舞伎を演じるということはほとんど見られない。ところが、江戸時代も中期以降になると、歌舞伎を人びとは演じ楽しみだすようになるのである。

歌舞伎の歴史を簡単に振り返ると、1603年（慶長8）、京都の四條河原での出雲阿国の念仏踊りが始まりといわれている。出雲阿国の踊りは当初「ややこ踊り」といわれたが、それに所作を付ける工夫を加え阿国歌舞伎として好評を博した。出雲阿国によって四条河原から始まった歌舞伎は、その後、京都、江戸、大坂等の都市の芝居小屋で興行されるようになっていく。そのうち、歌舞伎役者達が地方に出かけ芝居を行うようになり、このような地方興行を通して歌舞伎は地方に浸透していった。また、地方にも歌舞伎を行う集団が結成され、歌舞伎の裾野が広がっていく。やがて、人びとは歌舞伎を観るだけでなく自らが歌舞伎を演じるまでになるのである。これが村芝居といわれているものである。

村芝居を手懸かりに江戸時代末から明治初期にかけて人びとが芸能を自ら演じそれを楽しむ遊芸について京都の部落史というフィールドでその一端を見てみたい。

村芝居について

村芝居の成立について、守屋毅氏によると、「村芝居 - なかでもその中核をなす地芝居の始期は、享保以前にまでさかのぼる可能性をもちつつ、その全国的規模での成立は、ひとまず宝暦～天明という時期で押えて差し支えないように思われる」ということである（『村芝居 近世文化史の裾野から』 122ページ、平

凡社、1988年）。

これに対して、景山正隆氏は、「地芝居は享保以前から各地で盛んに行われるようになっていたのではないかとし、「いずれにしても、地芝居の発祥はかなり古く、その時期を明確にすることは困難である」といわれている（景山正隆「人形と村芝居」『日本芸能史』6所収、法政大学出版局、1988年）。

守屋、景山両氏で村芝居の成立、発祥の時期について異なっているものの、ともかく江戸時代中期頃から各地で盛んに行われるようになっていたといえるだろう。そして、村芝居は文化・文政期（1804～1830年）以後に地方に広範に浸透し、隆盛を極め、幕末から明治初期にかけてもっとも盛んに行われたといわれている。

守屋氏、景山氏いずれも村芝居を地芝居とも表記されているが、守屋氏によれば次のように述べられている。村芝居を指す語として農村歌舞伎、地狂言、地芝居、田舎芝居等の用例があるが、「村芝居という言葉がもっとも穏当である」（前掲書 124ページ）。というのも、村芝居は、それまで行われてきた村の祭礼の行事に歌舞伎の上演が結合することによって成立し、村の年中行事として土着した。これからも、村芝居は村の祭礼との結びつきがきわめて強いこと、そして村の年中行事の一つに組み込まれている点にその特色を見ることが出来るということである。

さらに、村芝居の盛行をもたらしたものに、江戸時代を通して増えていった「休み日」との関わりも深いということである。祭礼とともに「休み日」、「遊び日」の増加が、人びとに遊興への関心をもたらし、遊興の中に歌舞伎への熱中が占めることとなった。このことから、村芝居の歴史は単に芸能史的な意味だけではなく、近世期の農民文化の面での新しい展開と見るべきであるとされる。

村芝居の禁止

江戸時代中期以降、各地で盛んに行われるようになった村芝居であるが、幕府は度々村芝居に対して規制を行った。幕府の規制について、天保の改革の時期に京都で出された触^{ふれ}で簡単に見てみよう。

天保の改革が始まった1841年（天保12）11月、村々の神事祭礼のみならず、「作物虫送、風祭」等と称し、芝居・見世物同様の催しが行われていることに対して「不埒之事」とし、このような渡世をする者や風儀の悪い旅商人や河原者を村に立ち入らせることを禁止する達を出している。同様の触は1799年（寛政11）にも出されているが、「近来猥二相成候趣相聞」とあることから一向に守られることがなく盛んに行われたのであろう。

村芝居や見世物を禁止する理由として、芝居などに百姓が熱中することは「遊興情弱よからぬ事を見習、自然と耕作二も怠り候よりして荒地多困窮二至、終二其果八離散之基二も成候事二候」という。芸能を「遊興情弱よからぬ事」とし、取締りの対象として、「遊芸・歌舞伎・浄瑠璃・踊の類、惣て芝居同様之人集メ」ることを禁止した〔『京都の部落史』第5巻 490ページ〕。

ついで、翌1842年（天保13）12月、風俗取締りの一環として上記の達しで「河原者」と称された歌舞伎役者等に対して「芝居之有る町内限り」に住うこと、「素人」との交際の禁止、身分を慎むこと、また、百姓、町人に対しては、「元来役者共は至っていやしきものにて、百姓・町人とは身分の差別之有る」ことを弁えること等を触れている〔第5巻 494ページ〕。

歌舞伎役者の社会的地位は、1708年（宝永5）の小林新助と弾左衛門との相論で、弾左衛門側の敗訴により、役者が弾左衛門の支配から脱してはいるが、この布令でも「役者共は至っていやしきもの」とあるように社会的賤視からはまだ解放されていなかったといえる。とはいえ、賤視される一方で、交際の禁止を出さざるを得ない程、役者と町人達との交際が頻繁に行われていたということが、この触から見てとれるだろう。

この後、1843年（天保14）2月、役者だけではなく芝

居札売茶屋をはじめとする芝居の興行関係者もすべて芝居町内に居住するように命じている。また、役者が住居町外の芝居に出る場合は、通勤を認めず、当該町に移住することを命じている〔第5巻 494～495ページ〕。

この時とられた芸能に対する厳しい統制策は、祭礼の際の村芝居の禁止や歌舞伎役者への統制強化にとどまらず、大道芸にも及んでいる。

1842年（天保13）10月、「唄念仏・軒附」と称して「素人二而夜分唄・三味線・浄瑠璃等かたり歩行」することを禁止している〔第5巻 491ページ〕。「軒附」、「歩行」とあることから、「素人」、すなわち町人達が市中で夜分、三味線を片手に唄念仏や浄瑠璃語りを行っていたということであるから、今日でいう「流しの歌手」が生まれていたことがうかがえる。

一方、非人身分が行っていた大道芸に対しては、翌1843年（天保14）2月、寺社の境内や小路などで歌舞伎狂言の仕形をして人びとから銭を得ていることを取り締るように悲田院年寄りおよび小屋頭に申し渡している〔第5巻 495ページ〕。

京都では非人の雑芸者を与次郎^{よじろう}とか与次郎の手代（『淀古今真佐子』）などと呼んでいたということである。門付芸などの雑芸者や厄払い等は、四座雑色^{しざざうしき}支配の下に岡崎に置かれた悲田院に統括される非人小屋が洛中洛外に約70箇所あり、この小屋に間借りのかたちで居住していたと言われている。非人身分の雑芸者によって繰り広げられた大道芸の中に歌舞伎が取り入れられ、辻芝居として好評を博していたことについては、本誌第6号の拙稿「辻芝居について」ですでに触れている。

天保の改革の時期に出されたこれ等の触を通して、歌舞伎や浄瑠璃などが当時の人びとにとっていかに身近な芸能として愛好されていたかを知ることが出来る。

柳原町の「休日遊」

1. 「休日遊」について

芸能に人びとはどのように接し、楽しんだかを、本稿は村芝居から見ようとしているが、村芝居については、『京都の部落史』史料編では、明治14年に行われたものが収録されているのみである。そこで、「柳原

町史」の中で柳原町の「休日遊」の記述を中心に見てみたい。

愛宕郡柳原荘の戸長役場が京都府の依頼を受けて、1887年（明治20）に着手した「町村沿革取調書草稿」とそれを清書した草稿および江戸時代の古文書からなる「柳原町史」は、同町の沿革、組織、生業、賦役、慣習等が詳しく記されている。その中の「休日遊」の項に次のような記述が見られる〔第5巻 498～500ページ〕。

一、氏神祭礼 四月上卯ノ日、稲荷祭、七条郷、小稲荷 八流シ
五月十四日、日吉祭。八条ノ上
餓（俄）ト云ヒテ、村内軒先ニ於テ演シ、又軒付ト云ヒテ、浄瑠璃及ヒ端歌等ヲ唱ヒ三味線ヲ弾テ楽シミ、小児八十二ト云ヒテ献燈ヲ昇歩行入。

この箇所については『京都の部落史』と『日本庶民生活史料集成』第14巻（三一書房、1971年）に所収のものとの間で3カ所に異同がみられる。「餓」の箇所には『京都の部落史』では「（俄）」と編者注記が加えられている。『日本庶民生活史料集成』では「餓」はそのままである。「餓」とすると意味が不明になり、「^{にわか}俄」と解するほうが妥当であると考えるので、本稿では『京都の部落史』の編者注記に拠りたい。また、「端歌」であるが、『日本庶民生活史料集成』では「短歌」とある。さらに、「献燈」であるが『日本庶民生活史料集成』では「献酬（樽力）」とある。いずれも『京都の部落史』に拠ることとする。

柳原町の七条郷、小稲荷では伏見稲荷神社の祭礼で四月上卯ノ日に行われる稲荷祭り、八条上では日吉神社の祭礼で五月十四日に行われる日吉祭り当日、「流し餓（俄）」が町内の家の軒先で演じられ、「軒付」と呼ばれる浄瑠璃や端歌などを歌い三味線を弾いて楽しむことが行われている。また、子供達の間では「十二」といわれる行事が行われている。「十二」では、子供達が灯りをついで町内を歩いたようだが詳しいことは現在のところわからない。錦林では大豊神社の祭日、「奉燈」と書かれた下に提灯を上段に2個、中段に4個、下段に6個、合計12個を吊り下げたものを子どもたちが引き廻す「十二灯」の行事が行われている。「十二灯」と呼ばれる行事は錦林だけではなく、府下

では久美浜町でも行われているということである。柳原町の「十二」と呼ばれる行事もこれらと同じものなのか、今後検討してみたい。

「柳原町史」によると柳原町には神社は当時なかった。解放令を前後する時期、伏見稲荷神社や日吉神社の氏子として七条郷や小稲荷、八条上の人々が組み込まれ、それぞれの祭礼の一端を担っていたということは考えにくい。この事項が「休日遊」の項に記載されていることから、それぞれの町域が属する神社の祭礼に合わせて各町が祭礼当日、町内で祭日を楽しんだと考えたほうが妥当と思われる。当時は祭日を休日として、遊興を楽しむことが広く行われていたということであろうか。

2. 流し俄

柳原町での祭日の遊興に流し俄が行われていたことが注目すべき点である。俄は仁輪加とも二〇加とも表記され、江戸時代中期から明治にかけて京都・大坂・江戸吉原・博多で流行した大衆演劇の一つである。俄とは、「にわかに思い付いたこと、ハッピーなことを仕出かすことということで、人の意表をついて楽しみ娛ませる芸能行為のこと」、「滑稽・風刺・洒落・頓智などの即興頓作」（西角井正大「俄・万作・神楽芝居」『大衆芸能資料集成』第8巻所収、三一書房、1981年）である。

西角井氏によれば、これを職業とする者も出てきたという。寛政以後（1789年～）のことであるが『守貞謾稿』にも大坂のブコの俄師が取り上げられており、江戸に出て寄席稼をする者も見られたという。安永・天明期（1772～1789年）には「座敷俄」がおこり、この頃「流し俄」も盛んに行われ、やがて、見世物としての「独り俄」、数人で行われる「立合俄」、芝居がかりの「長俄」等が行われるようになった。俄提灯（手持ちの角提灯）を持って、「にわかじゃ、にわかじゃ」といって流し歩き、客の所望によってその場で即席の俄を演じたのが「流し俄」である。さらに、「京都では古く、今宮・祇園・御霊・稲荷などの大きな祭礼の場で自然発生的に仮装の即興が行われていたらしい（『孔雀楼筆記』）」ということである。

ポテ鬘^{かつら}に素顔で演じられる俄はにわか思い付いた

ことをパロディーとして演じればよいというもの、観客の笑いを誘うには常日頃から修業が必要とされるだろう。俄を演じた人々は、稲荷祭り当日、町内で演じただけではなく、町外の祭礼の場をはじめとした場所に出かけ俄興行を行っていたということも考えられるのではないだろうか。

3. 軒付

「浄瑠璃及ヒ端歌等ヲ唱ヒ三味線ヲ弾テ楽シミ」とある「軒付」であるが、「村芝居の禁止」で見た、1842年（天保13）10月に出版された達、「軒付と唱、素人二而夜分唄・三味線・浄瑠璃等かたり歩行候者」とよく似た芸態の芸能であるといえる。

端歌について、『守貞謾稿』では、「時々変化流布する小唄の類を云ふ。惣名、長唄に対する名目か。嘉永の頃より、歌沢某なる者、始めて師匠となり一家をなし、種々の小唄を三弦とともに教授する・・・（中略）・・・これまた今世、一種遊民の業となる」。幕末の頃に始まり、三味線の伴奏で唄われた小唄が端歌である。「一種遊民の業」とあることから、端歌を職業とする人々が現れ、それらの人びとは「遊民」と見られていたということである。このことから、軒付も俄と同様、祭日に町内で見られただけではなく、軒付を行った人々は町外に出かけ、三味線の音色に合わせて端歌を唄い流しの稼をしていたと考えられる。

柳原町には悲田院支配下の七条裏があり、その非人小屋に住む住民達の多くは辻芝居等の芸能に従事していたことは本誌第6号で見たが、「柳原町史」の「休日遊」の記述から、七条裏の住民に限らず他の柳原町の人々の中にも芸能稼をしていた人びとが多数存在していたといえる。

「休日遊」の記述から、祭日ともなれば柳原町内は、俄の滑稽劇が軒先で行われ、三味線の音色にあわせた端歌が各所から聞こえ、祭日らしい華やいだ光景が見られたことだろう。そして、住民達はそれを楽しみ、憩いの時を過ごしたことがうかがえる。

むすび

近世後期、地方の村々で盛んに行われた村芝居であるが、前述した通り『京都の部落史』で見られるのは、保津の部落での村芝居だけである。保津の部落で芝居が行われたのは、1881年（明治14）10月20、21日のことである。この時の芝居については、『京都の部落史』では「村芝居と水難事故」[第2巻 50～51ページ]中、松方デフレによって部落の困窮が深まる中であって芝居を楽しんだ当時の生活の一端が詳しく記述されているので第2巻を読んでいただきたい。

保津の村芝居の歴史を考えるにあたって遺されている史料は、今のところ、「第十四年 明治暦/ 芝居入出雑用帳/ 世話方/ 松本作蔵」と題された表紙が付けられた史料だけである[第6巻 257～260ページ]。

「歌舞伎については、丹波・丹後によくのこされるたくさんの舞台が往時の盛況を物語り、天座（福知山市）などでは請われて客演した地狂言の歴史も伝えられる」（京都府教育委員会編刊『京都の民俗芸能』, 1975年）ということである。村芝居が盛んに行われた丹波地方に位置する保津村だけに、丹波地方で行われた村芝居との関わりも無視することが出来ない。このような意味からも保津の村芝居については稿を改め見てみたい。（なかじま ちえこ/京都部落問題研究資料センター運営委員）

収 集 図 書 (2002年7月～9月受入)

総記 逐次刊行物

研修 124（京都市職員研修所刊，2002.9） 「同和問題の現状と行政課題」（伊藤悦子）所収

総記 博物館

大阪の水平運動と活動家群像（大阪人権博物館編刊，2002.7） 展示図録

近木郷を考古学する 役所・寺・街道（貝塚市教育委員

会編刊, 2002.1) 郷土資料展示室特別展示図録
 障害者でええやんか! 変革のとき 新しい自立観・
 人間観の創造を(大阪人権博物館編刊, 2002.9) 展
 示解説図録

総記 新聞

労働週報 第1号～第40号 復刻版(不二出版刊, 1998.
 10): 16,800円 大正11年2月～大正12年4月(労働週報
 社発行)

部落問題 総記

大阪人権博物館年報 No.11 2001年度(大阪人権博物
 館刊, 2002.7)

人権口コミ講座(京都府刊, 2000.3)

杉之原寿一・部落問題著作集 第14巻 最終段階の同
 和行政研究(杉之原寿一著, 兵庫部落問題研究所刊, 19
 97.4): 8,000円

杉之原寿一・部落問題著作集 第15巻 同和対策事業
 史の研究(杉之原寿一著, 兵庫部落問題研究所刊, 1997.
 8): 8,000円

杉之原寿一・部落問題著作集 第16巻 部落の現状調
 査研究(続2)(杉之原寿一著, 兵庫部落問題研究所刊,
 1997.6): 8,000円

杉之原寿一・部落問題著作集 第17巻 部落の現状調
 査研究(続3)(杉之原寿一著, 兵庫部落問題研究所刊,
 1997.10): 8,000円

杉之原寿一・部落問題著作集 第18巻 人権意識の調
 査研究(杉之原寿一著, 兵庫部落問題研究所刊, 1997.1
 2): 8,000円

杉之原寿一・部落問題著作集 第19巻 人権意識の調
 査研究(続)(杉之原寿一著, 兵庫部落問題研究所刊,
 1998.2): 8,000円

杉之原寿一・部落問題著作集 第20巻 部落問題に関
 する理論的研究(杉之原寿一著, 兵庫部落問題研究所
 刊, 1998.3): 8,000円

だれも書かなかった「部落」3(寺園敦史著, かもが
 わ出版刊, 2002.6): 1,800円

部落解放研究京都市集会[資料] 第33回(部落解放
 研究京都市集会実行委員会事務局刊, 2002.2)

ワシラノシンブン 第1号～第30号 復刻版(不二出版

刊, 1990.10): 18,900円 水平運動・部落史研究資料5,
 第19号より「解放新聞」に改題

部落問題 生活・差別事件・聞き書き・伝記

朝田善之助全記録 51(朝田教育財団刊, 2002.8): 1,
 000円

「オール・ロマンス事件」再考(大阪人権博物館編刊,
 2002.3) 執筆・キム チョンミ, 前川修

公正な採用選考をめざして(労働省刊, [199-])

福田村事件の真相 第2集 関東大震災の悲劇に学ぶ
 (「福田村事件の真相」編集委員会編, 千葉福田村事件
 真相調査会刊, 2002.3): 600円

部落が語りかけるとき(部落解放同盟小倉地区協議会
 編, 福岡部落史研究会刊, 1992.6): 700円

部落差別問題の経過報告(同志社大学刊, 1962.10)

部落問題 歴史

和泉国かわた村支配文書 上, 下 預り庄屋の記録
 (藤本清二郎編, 清文堂出版刊, 1999.2, 2001.12): 15,
 000円, 15,500円

田辺同和史 第4巻 年表編(田辺同和史編さん委員会
 編, 田辺市刊, 2002.3)

部落史の「ありのまま」へ 全国水平社創立80周年
 の視点から(京都人権啓発センター・ネットからすま編
 刊, 2002.6)

部落問題 同和行政

伊都郡応其村伏原地区における新興産業の実態(和
 歌山県同和問題研究委員会刊, 1955.7)

京都市における同和行政の概要 平成12年度(京都市
 文化市民局人権文化推進部同和対策課編刊, 2000.12)

京都市における同和行政の概要 平成13年度(京都市
 文化市民局人権文化推進部同和対策課編刊, 2001.12)

啓発の手引き 同和問題の解決に向けて 第7版(京都
 府刊, 1996.3)

特別施策としての同和対策事業の終結とその後の取
 組 21世紀・人権文化の構築のために(京都市刊, 2002.
 1)

部落問題 解放運動

解放への国民大行動 「同対審」答申完全実施要求
 部落解放国民運動・中間報告（部落解放同盟中央本部
 編，部落解放同盟中央出版局刊，1967.10）
 社会事業家の要性（山室軍平講演，中央社会事業協会
 刊，1925.3） 地方改善事業叢書第5輯 複写
 社会事業に於ける融和事業の地位（生江孝之著，中央
 融和事業協会刊，1927.8） 融和資料7 複写
 水平運動の精神（栗須七郎著，大阪府水平社本部刊，1
 924.7）
 水平道（栗須七郎著，水平道舎刊，1929.7）
 部落解放基本法制定要求国民運動京都市実行委員会
 大会議案書 第15回（部落解放基本法制定要求国民運動
 京都市実行委員会刊，2001.11）
 部落解放京都府女性集会討議資料 第32回（部落解放
 同盟京都府連合会女性部執行委員会編，部落解放同盟京
 都府連合会刊，2002.8）
 部落解放全国女性集会 [資料] 第47回（部落解放同
 盟中央女性対策部編，部落解放同盟中央本部刊，2002.3）
 部落解放同盟京都府連合会女性部定期大会議案書
 第5回～第8回（部落解放同盟京都府連合会女性部刊，1
 999.3～2002.4）
 部落差別のはじまりと身分制度（部落解放同盟全国連
 合会中央本部編刊，2002.7） 水平文庫26
 融和事業の精神（守屋栄夫述，中央融和事業協会刊，1
 927.10） 融和資料第8輯 複写
 融和随想（谷龍之助著，中央融和事業協会刊，1928.12）
 融和資料第12輯

部落問題 同和教育

人権教育資料（京都府総務部文教課刊，1999.3）
 人権教育と総合的な学習（荒川哲郎，児玉克哉編，地
 域国際活動研究センター刊，2002.7）：1,500円
 人権教育の新しい地平へ 同和教育の視点と『かが
 やき』活用の可能性（谷口研二著，福岡県部落解放・人
 権研究所刊，2002.4） ブックレット菜の花7 ：1,000
 円
 全国同和教育研究大会資料 第12回（全国同和教育研
 究協議会刊，1960）
 続 共生教育 確かな同和・人権教育のために（仲田
 直著，阿吽社刊，2002.7）

地域に学ぶフィールドワーク 構想と展開（大阪市教
 育センター刊，2002.3） 研究紀要第157号
 融和教育指導者講習会要覧（[文部省ほか]刊，[19
 37]）

日本の差別問題

「オカマ」は差別か 『週刊金曜日』の「差別表現」
 事件（伏見憲明[ほか]著，ポット出版刊，2002.2）：
 1,500円 著者：及川健二，野口勝三，松沢呉一，黒川宣之，
 山中登志子，春日亮二，志田陽子，下村健一，taka，田亀源五
 郎，平野広朗，浩史，本多勝一，宮崎留美子
 少年Mのイムジン河（松山猛著，木楽舎刊，2002.6）：
 952円
 職業婦人の社会的進出について（大阪市社会部労働課
 編刊，1934.1） 社会部報告第180号 複写
 新KY0のあけぼのプラン 京都府男女共同参画計画ダ
 イジェスト版（京都府府民労働部女性政策課編刊，200
 1.4）
 丹波マンガ記念館人権資料（丹波マンガ記念館刊，
 199-）
 日本における差別と人権 第4版（部落解放・人権研究
 所編刊，2002.3）：2,000円
 火花 北条民雄の生涯（高山文彦著，飛鳥新社刊，1999.
 8）：1,900円

日本史

維新の構想と展開 日本の歴史第20巻（鈴木淳著，講
 談社刊，2002.7）：2,200円
 河内 社会・文化・医療（森田康夫著，和泉書院刊，2001.
 9）：2,800円 上方文庫23
 記録史料と日本近世社会 2 2000～2001年度千葉大
 学大学院社会文化科学研究科プロジェクト研究成果
 報告書第46集（菅原憲二編，千葉大学大学院社会文化
 科学研究科刊，2002.3） 『シリーズ近世の身分的周縁』
 を読む（横山陽子著），史料紹介 大屋土由著「伊多加考」
 （横山陽子著），史料紹介 宇和島藩盲人養米制度史料
 （河合南海子）所収
 草相撲が盛んだったころ 祭礼相撲の周縁（小林基芳
 著，浅科村教育委員会刊，2002.4） 浅科村の歴史5
 嵯峨風雪月花（今井幸代著刊，1984.3） 複写

新修亀岡市史 資料編第2巻（亀岡市史編さん委員会編，
亀岡市刊，2002.3）

新修亀岡市史 資料編第2巻 別冊（亀岡市史編さん委
員会編，亀岡市刊，2002.3）

政党政治と天皇 日本の歴史第22巻（伊藤之雄著，講
談社刊，2002.9）：2,200円

日本の歴史 河原と落書・鬼と妖怪 新訂増補版（朝日
新聞社刊，2002.8）：500円 週刊朝日百科 中世2-2

明治人の力量 日本の歴史第21巻（佐々木隆著，講談
社刊，2002.8）：2,200円

明治前期政治運動史料 第2輯 国会開設前後1（近代
史文庫編刊，1963.8） 愛媛近代史料10

伝記

七十年の回想（有馬頼寧著，創元社刊，1953.12）：1,
500円

痴人の繰言 アナキストの思い出（岩佐作太郎著，
日本アナキストクラブ刊，1983.9）

鳴雪白叙伝（内藤鳴雪著，岩波書店刊，2002.7）：660円

社会科学

一国民俗学を越えて（赤坂憲雄著，五柳書院刊，2002.
6）：2,300円

岩波 女性学事典（井上輝子〔ほか〕編，岩波書店刊，
2002.6）：4,830円

京都からKYOTOの未来 1999年5月～2001年5月民主・

都みらい京都市議員団 京都市会・本会議発言の記
録（民主・都みらい京都市議員団刊，2002.3）

させられる教育 思考途絶する教師たち（野田正彰著，
岩波書店刊，2002.6）：1,700円

生活保護50年の軌跡 ソーシャルケースワーカーと
公的扶助の展望（『生活保護50年の軌跡』刊行委員会
編，全国公的扶助研究会刊，2001.11）：3,000円

宮本常一の伝説（さなだゆきたか著，阿吽社刊，2002.
8）

無産者救護制度體系（野間繁著，章華社刊，1934.10）

ヤクザの文化人類学 ウラから見た日本（ヤコブ・ラ
ズ著，高井宏子訳，岩波書店刊，2002.7）：1,100円

芸術

写された幕末 石黒敬七コレクション（石黒敬七著，
明石書店刊，1990.4）：6602円

貝塚市内の仏像（貝塚市教育委員会刊，2001.11）

貝塚市の指定文化財 平成9～13年度指定（貝塚市教
育委員会編刊，2002.5）

文学

中上健次と読む『いのちとかたち』 山本健吉著
後（〔中上健次資料収集委員会〕編刊，2002.6）

ねむり姫がめざめるとき フェミニズム理論で児童
文学を読む（ロバータ・シーリンガー・トライツ著，吉
田純子，川端有子監訳，阿吽社刊，2002.7）

収集逐次刊行物目次（2002年7月～9月受入）

～各逐次刊行物の目次の中から編集部判断でピックアップしました～

明日を拓く 44・45（東日本部落解放研究所刊，2002.3）：
2,000円

特集 同和対策事業33年を検証する 2

跡地発 18（大阪市よさみ人権協会刊，2002.7）

キネマでとった杵柄 17 『カンダハール』編 嶋田あがつ
た

シリーズ11 十人十色の部落問題 カムアウトしてみれば
... 池田久美子

IMADR-JC通信 119（反差別国際運動日本委員会刊，200
2.7）：500円

特集 沖縄復帰30周年記念 沖縄で考えた複合差別

本の紹介 『日本における差別と人権』（部落解放・人権
研究所編）

ウイングスきょうと 51号（京都市女性協会刊，2002.
8）

コミックで考えるジェンダー 『LOVE MY LIFE』（やまじ
えびね著）

図書情報室新刊案内

『ジェンダーの法律学』（金城清子著）／『サバイバー
ズ・ハンドブック 改訂版 性暴力被害回復への手がが

- り』(性暴力を許さない女の会編著) / 『描かれたエルダー』(日本経済新聞社編) / 『老後は誰と暮らしたい?』(門野晴子著)
- 岡山部落解放研究所報 232号(岡山部落解放研究所刊, 2002.6) : 100円
人権擁護法案について 4 若林義夫
- 岡山部落解放研究所報 233号(岡山部落解放研究所刊, 2002.7) : 100円
人権擁護法案について 5 若林義夫
- 岡山部落解放研究所報 234号(岡山部落解放研究所刊, 2002.8) : 100円
人権擁護法案について 6 若林義夫
- 解放教育 416(解放教育研究所編, 2002.8) : 700円
特集 平和総合学習の視座と方法 平和的共生への構想力を問う
調査に見る素顔のいまどき高校生 14 ポストモダンの高校生 鍋島祥郎
- 図書紹介 『学校臨床学への招待 教育現場への臨床的アプローチ』(近藤邦夫・志水宏吉編著) 葛上秀文
高校から総合学習を創る 3 これが私の選ぶ道 自己決定をキーワードに 平野智之
- 解放教育 417(解放教育研究所編, 2002.9) : 700円
特集 書を読み, 世界を読む 読書の愉しみ
高校から総合学習を創る 4 平和を創る総合学習 海を越えた出会いのプログラム 平野智之
調査に見る素顔のいまどき高校生 15 共生社会へ 個性化教育の可能性 鍋島祥郎
- 解放教育 418(解放教育研究所編, 2002.10) : 700円
特集 自己実現としての表現活動 創造力の解放を求めて
高校から総合学習を創る 5 地域や世界とつながる 忘れてはいけない大人の宿題 平野智之
- 月刊解放の道 222号(全国部落解放運動連合会刊, 2002.7) : 350円
人権擁護法に名を借りたメディア規制 さらに有事法制にも 大西五郎
- 月刊解放の道 223号(全国部落解放運動連合会刊, 2002.8) : 350円
人権教育・啓発をめぐる動向とこれからの課題 梅田修
- 法後における教育・行政の実態と問題点 埼玉・福岡・滋賀
月刊解放の道 224号(全国部落解放運動連合会刊, 2002.9) : 350円
地域運動の可能性 発展的転換のために 碓井敏正
同和対策の終結と同和教育のゆくえ 梅田修
地域憲章づくりの視点 杉尾敏明
解放運動の発展的転換によせて 村下博
解放へのはばたき 69(日本基督教団解放センター運営委員会刊, 2002.7)
特集 いま何が部落解放の課題か
読書案内 『水平社の原像』(朝治武著)
架橋 7号(鳥取市人権情報センター刊, 2002.8)
全国水平社創立80周年記念座談会 鳥取市における部落解放運動のあゆみ
カトリック部落問題委員会ニュースレター 81(カトリック部落問題委員会刊, 2002.9)
同化と排外の狭間で 「寄留の民」・部落差別から 金原薫
かわとはきもの 120(東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2002.6)
靴の歴史散歩65 稲川實
シリーズ 足の機能に障害がある人の靴5 イギリスのビスポーク靴 大野貞枝
皮革関連統計資料
季節よめぐれ 175号(京都解放教育研究会刊, 2002.8)
今後の同和・人権教育のあり方 伊藤悦子
季節よめぐれ 176号(京都解放教育研究会刊, 2002.9)
21世紀の人権教育 自分を好きになることから始めよう!
金香百合
季節よめぐれ 177号(京都解放教育研究会刊, 2002.10)
共生を育む学校教育を展望する 大阪市における《在日韓国・朝鮮人教育》実践史から 稲垣有一
京都市政史編さん通信 10号(京都市市政史編さん委員会刊, 2002.6)
京都市政史第1冊目の刊行を今年度末に控えて 山添敏文
井上密市長誕生の経緯に関する若干の考察 松下佐知子
京都市政史編さん通信 11号(京都市市政史編さん委員会刊, 2002.9)

- 学区が歴史記述の単位になること 伊東宗裕
 ジフテリア予防接種禍事件と京都市の対応 松中博
 グローブ 30 (世界人権問題研究センター刊, 2002.7)
 女性たちの全国水平社 2 「刺の櫛 われらに強いて」を
 詠んだ糸若柳子さん 福田雅子
 朝鮮通信使 6 朝鮮通信使を描いた人びと 仲尾宏
 「坩堝」と有馬頼寧 白石正明
 人権の”館” 和泉市立人権文化センター 平野一郎
 国際人権ひろば 45 (アジア・太平洋人権情報センター
 刊, 2002.9) : 300円
 特集 歩いて見たフィリピンの人権教育
 こべる 113 (こべる刊行会刊, 2002.8) : 300円
 岐路に立つ同和教育 「同和教育から人権教育へ」をめ
 ぐって 原田琢也
 死あるがゆえに、生は輝く 高木奈保子
 米田さんのこころ 吉田智弥
 こべる 114 (こべる刊行会刊, 2002.9) : 300円
 特権の要求から、共感の創出へ 行政内個人情報保護を
 めぐる個人的な実験の中間報告 山城弘敬
 部落問題についてなぜ書くのか 曾野綾子さんの怒りに
 応えて すみだいくこ
 こべる 115 (こべる刊行会刊, 2002.10) : 300円
 障害者と健常者の関係を考える 東谷修一
 「日本人」になることの是非 吉田智弥
 佐賀部落解放研究所紀要 19号 (佐賀部落解放研究所
 刊, 2002.3)
 『いのちの花』からのメッセージ 被差別部落(ムラ)
 の伝承の絵本化 園田久子
 史料紹介 唐津領岸田家文書『物成取立帳』(その三)
 浦川和紀子
 史料紹介 多久家『御屋形日記』から 中村久子
 差別とたたかう文化 26 (最終号) (「差別とたたか
 う文化」刊行会編) : 400円
 吹田事件・わが青春のとき 金時鐘
 わたしの青春 1950年代 師岡佑行
 「記者遍歴から」最終回 部落差別のこと 平野一郎
 狭山差別裁判 343号 (部落解放同盟中央本部中央狭山
 闘争本部刊, 2002.7) : 300円
 BOOK 『僕はやってない! 仙台筋弛緩剤点滴混入事件』
 (守大助, 阿部泰雄著)
 狭山差別裁判 344号 (部落解放同盟中央本部中央狭山
 闘争本部刊, 2002.8) : 300円
 「仙台筋弛緩剤点滴混入事件」 えん罪の真相 阿部泰雄
 月刊滋賀の部落 337号 (滋賀県同和問題研究所刊, 200
 2.7) : 400円
 同和加配から児童生徒支援加配へ 滋賀県で何が変わり、
 何が変わらなかったのか 高岡光浩
 月刊滋賀の部落 339号 (滋賀県同和問題研究所刊, 200
 2.9) : 400円
 盲ろう者と家族の現状 三塚武男
 人権意識調査の「同和地区の起源」問題をめぐって 水谷
 孝信
 書評 『愛する人たちへ 日本初のグループホーム型特養
 の挑戦』(松村正希・藤居眞共著) 中垣昌美
 社会科学 69 (同志社大学人文科学研究所刊, 2002.9) :
 1,000円
 男女大学生にみられるジェンダー観の比較 家庭内での
 ジェンダー観形成過程に注目して 山田礼子
 メキシコにおける先住民女性とジェンダー サパティス
 タ民族解放軍に参加する女性たち 柴田修子
 人権と部落問題 691号 (部落問題研究所刊, 2002.7) :
 630円
 特集 人権擁護法案
 人権擁護法案の廃案を、然らざれば一大反戦・人権闘
 争を 村下博 / 人権擁護法案と表現・メディア規制 田
 島泰彦 / 公権力による人権侵害 橋本宏一 / 国民の義務
 とした「差別禁止」条項などの問題 新井直樹
 「映画」でみる子どもの権利 4 『蝶の舌』 『ミュージッ
 ク・オブ・ハート』 『シェナンドー河』 丹波正史
 文芸の散歩道 平等と生命の尊厳にみる母性 『橋のない川』
 片岡清子
 川端分館の頃 私の自伝的な回想 4 三人の運動家 東
 上高志
 人権と部落問題 692号 (部落問題研究所刊, 2002.8) :
 630円
 特集 新たな加配教員制度

本棚

『犬になれなかった裁判官 司法官僚統制に抗して36年』(安倍晴彦著) 奥山峰夫ノ『西からの夜明け』
(菱崎博著) 石岡克美

世界の人権問題 3 韓国の人権問題 玄基榮『地上に匙ひとつ』を手がかりに 中村福治

文芸の散歩道 錯綜する「路地」の血の狂宴 中上健次
『枯木灘』 渡邊巳三郎

「映画」でみる子どもの権利 5 『看護婦のオヤジがんばる』『乳泉村の子』『続・キューポラのある街 未成年』

丹波正史

川端分館の頃 私の自伝的な回想 5 川端分館を立ち上げる 東上高志

人権と部落問題 693号(部落問題研究所刊, 2002.9): 630円

特集 現代の冤罪事件

冤罪はなぜ起こる 秋山賢三ノなぜ自白をしたのか 桜井昌司ノ私は痴漢ではありません 長崎満ノ黒人ジャーナリスト、ムミア・アブ=ジャマール冤罪事件 人種差別と政治的予断による死刑宣言 今井恭平

本棚 『近世尾張の部落史』(愛知県部落解放運動連合会刊) 尾川昌法

文芸の散歩道 『育ち行く雑草』五部作(坂市巖著) 秦重雄

「映画」でみる子どもの権利 6 『さすらいの航海』『愛を乞う人』『蜂の巣の子供たち』『キクとイサム』 丹波正史

川端分館の頃 私の自伝的な回想 6 財政問題 東上高志

人権21 調査と研究 159(岡山部落問題研究所刊, 2002.8): 650円

「部落民意識」論への疑問 朝治武氏の近著『水平社の原像』にふれて 菅木一成

本の紹介 『黒い陽炎 県閩融資究明の記録』(高知新聞社刊) 窪田充治

資料から見た新見地方の農村生活1 竹製品製造 竹本豊重
史料は語る7 倉敷村の牢番 7 大森久雄

月刊人権問題 307(兵庫人権問題研究所刊, 2002.7): 350円

神戸市上池地区のまちづくり調査 同和対策終結後の新しいまちづくり政策提言 安田正

部落解放運動を綴じるものの責任の重さをかみしめて 同和・部落でない 新しい時代の扉を開きました 末永弘之

月刊人権問題 308(兵庫人権問題研究所刊, 2002.8): 350円

特集 齋藤浩志先生を偲んで

月刊人権問題 309(兵庫人権問題研究所刊, 2002.9): 350円

奨学金制度と修学保障

身同 同和推進本部紀要 22号(真宗大谷派同和推進本部編): 1,000円

特集 ハンセン病と真宗

水平社博物館からの発信 守安敏司

「全国水平社宣言」と私 日野詢城

アイヌ民族として生きる これからの自分 長谷川由希
<差別の視座>から問われた業・宿業の問題 生實修

大谷派における解放運動と「業・宿業問題」 業・宿業学習会を通じての所感 信楽弘道

月刊スティグマ 80(千葉県人権啓発センター刊, 2002.7): 500円

特集 部落差別に乗じた悪質犯罪~エセ同和行為

月刊スティグマ 81(千葉県人権啓発センター刊, 2002.8): 500円

特集 この夏読みたいこんな本

月刊スティグマ 82(千葉県人権啓発センター刊, 2002.9): 500円

特集 DV対策先進県をめざす千葉

世界人権問題研究センター研究紀要 7号(世界人権問題研究センター刊, 2002.3)

規約人権委員会による自由権規約第26条の解釈・適用とその問題点 安藤仁介

自由権規約個人通報手続における国内的救済原則 1 薬師寺公夫

自由権規約の実施過程にみるマイノリティの権利 金東勲
トリニダード・トバゴの個人通報事例 フォローアップの観点から 坂元茂樹

被害者概念に関する規約人権委員会の判断基準 田中則夫
外国人の追放と家族の利益の保護 規約人権委員会の実
行を中心に 村上正直

岡山県水平社の成立について 白石正明

近世近江の陰陽師村の消長 滋賀県前田村を事例として
山本尚友

広島県吉和中学校教育差別事件への評価に関する覚書 研
究第2部同和教育チーム

民族語獲得・維持へのとりくみ 在日朝鮮人の民族子ど
も会・民族学級・民族学校を中心に 藤井幸之助

「リプロダクティブ・ライツ」と「リプロダクティブ・
ヘルス」の関係 カイロ行動計画を素材として 谷口真
由美

政策としての男女平等 山下泰子

全朝教通信 京都版 42 (全国在日朝鮮人教育研究協議
会京都, 2002.6) : 250円

中学校社会科教科書における在日韓国・朝鮮人関係記述
の検討 歴史・公民教科書を中心に 水野直樹

同和教育 484 (全国同和教育研究協議会編, 2002.7) :
150円

人権文化を拓く 64 大会ポスターの公募 中野守

同和教育 485 (全国同和教育研究協議会編, 2002.8) :
150円

人権のまちをゆく 11 大島案内ひきうけ会社～庵治第二
小学校の子どもたちからの発信～

人権文化を拓く 65 最近私が考えていること 坂東希

同和教育 486 (全国同和教育研究協議会編, 2002.9) :
150円

人権のまちをゆく 12 コリアンの史跡を訪れて 全朝教
(全外教)三重大会フィールドワーク参加記

人権文化を拓く 66 人間平等の原点に立ち返って 黒川み
どり

「同和」推進フォーラム 35 (真宗大谷派同和推進本
部刊, 2002.7)

第10回『水平社宣言』に聞く 小笠原正仁

ミュージアム訪問 おおくぼまちづくり館

『同和はこわい考』通信 158 (藤田敬一刊, 2002.8.4)
採録

曾野綾子『私日記1 運命は均される』の記述をめぐっ
て K.H/「同和問題をはじめ...」のフレーズは「百害
あって一利なし」(奈良県部落解放同盟支部連合会機
関紙『解放新聞』682,01/11/25)

はらっぱ 220 (子ども情報研究センター刊, 2002.7) :
700円

特集 今こそ、保育リテラシー

課題克服は学校・地域・家庭の連携で。旧同和保育所の
とりくみ 高槻市立富田保育所

私の本棚

『保育園で働くあなたに』(藤岡佐規子編著)/『こ
のつぎ なあに』(山中恒作 栗田八重子絵)

はらっぱ 221 (子ども情報研究センター刊, 2002.8) :
700円

特集 同和教育の現在とこれから

私の本棚

『白の闇』(ジョゼ・サラマーゴ著)/『忘れられない
言葉』(鈴木祥蔵著)

はらっぱ 222 (子ども情報研究センター刊, 2002.9) :
700円

特集 性暴力を受けた子どもへのサポート

私の本棚

『GO』(金城一紀著)/『ブッタとシッタカブッタ』
(小泉吉宏著)

ヒューマンライツ 172 (部落解放・人権研究所刊, 2002.
7) : 525円

生き方を問う学びの発信 富田林発: ジェンダーエッセ
イ集「めざめる女 つぶやく男」をめぐって 浮穴正博

現代史の目 11 1937年7月7日の前後 小山仁示

博物館と人権学習 23 おおくぼまちづくり館 小島伸豊

武者小路公秀回想記 3 武者小路公秀

黒人大学で学ぶ 3 黒人居住区の子どもの夢は すみだい
くこ

玲子さんの映画批評 「ノー・マンズ・ランド」(ダニス・
タノヴィッチ監督) 川西玲子

ヒューマンライツ 173 (部落解放・人権研究所刊, 2002.
8) : 525円

武者小路公秀回想記 4 武者小路公秀

現代史の目 12 八月一五日 小山仁示

黒人大学で学ぶ 4 黒人も人種差別者が すみだいくこ

エンパワメントと人権 19 ジェンダーと暴力 森田ゆり

玲子さんの映画批評 「アイ・アム・サム」(ジェシー・ネルソン監督) 川西玲子

図書紹介 『朝鮮のジャンヌダルク 論介』(鄭棟柱原著, 吳満訳編) 友永健三

最近読んだ本

『戦争プロバガンダ10の法則』(アンヌ・モレリ著) / 『自己決定権とジェンダー』(江原由美子著) / 『私, わたし~ろう者で性同一性障害 27歳の心の葛藤』(緒方英秋著) / 『教育不平等 同和教育から問う「教育改革」』(外川正明著) / 『空から墮ちた』(黒田征太郎著)

ヒューマンライツ 174 (部落解放・人権研究所刊, 2002.9): 525円

地球規模の情報ネットワークと地方自治体の役割 岡山市電子掲示板に係る有害情報の記録行為禁止に関する条例を制定して 小川雅史

インターネット上の差別事件の特徴と課題 田畑重志

連載 走りながら考える 同和地区はなくなったか 特別法失効と同和地区 北口末広

現代史の目 13 終戦前後の原爆報道 小山仁示

武者小路公秀回想記 5 武者小路公秀

玲子さんの映画批評 「チョコレート」(マーク・フォスター監督) 川西玲子

最近読んだ本

『さとうきび畑~ざわわ、通りぬける風~』(寺島尚彦、大塚勝久ほか著) / 『アメラジアンの子供たち 知られざるマイノリティ問題』(S・マーフィー重松著) / 『民族幻想論 曖昧な民族 つくられた人種』(スチュアート・ヘンリ著) / 『緊急出版 人権擁護法案・抜本修正への提案~どこを、どう、変える?』(部落解放・人権政策確立要求中央実行委員会刊)

ひょうご部落解放 105 (兵庫部落解放研究所刊, 2002.6): 700円

特集 「人権擁護法案」とは何か?

部落史の問題点 ともいきみかず

いのちの初夜 連載(中) 北条民雄

映画評 「スパイ・ゲーム」(トニー・スコット監督) 萩原弘子

書評

『屠場文化 語られなかった世界』(滋賀県教育委員会・反差別国際連帯解放研究所しが編) / 『日本の企業と同和問題 企業内同和研修のあり方を考える』(古山知己著)

部落解放 505号(解放出版社刊, 2002.7): 1,050円

第28回部落解放文学賞

部落解放 506号(解放出版社刊, 2002.8): 630円

特集BSE問題と食肉市場

BSEとは何か、いま食肉は安全か 山内一也/インタビュー 私たちがつくる食肉は安全です 岩本俊二, 安全性と透明性をさらに充実させる 井之上裕二/座談会 政府はと場の現場に目を向けてくれ/労働者の手で脊髄除去装置を開発 「ヨコハマセイフティー」がこうして生まれた

いまだ「戦場」報道されぬコソボ 吉岡忍

「人権」で読み解く江戸川柳 1 離婚女性のアジュール東慶寺 1 田結莊哲治

映像フリースペース 「イン・ザ・ベッドルーム」(トッド・フィールド監督) 白井佳夫

東京音楽通信 沖縄・奄美の「島唄」の広がり 藤田正

やっぱり今この本を 27 『ジェリコの夏』(ジョハナ・ハーウィッツ文, メアリー・アゼアリアン絵) 山下明生

本の紹介 『境界の輝き 日本文化の深層をゆく』(五木寛之・沖浦和光著), 『日本人のこころ4』(五木寛之著) 柳原一徳

インタビュー 部落解放同盟新中央書記長に聞く 可能性を信じられる社会を作り出すために 「法律に縛られない」解放運動の可能性 松岡徹

「ナナムの家」に滞在して 元日本軍強制連行慰安婦のおばあさんたち 宇田有三

部落差別の有無に関する議論(下) 部落差別を構造的にとらえるために 江嶋修作

連載 近代の奈落を歩く 23 反逆者と前衛の栄光と没落 水平線上の赤と黒(下) 宮崎学

部落解放 507号（解放出版社刊，2002.9）：630円
 特集 ポストコロニアリズムと沖縄 植民地主義は終わらない

対談 暴力の現場から「語り返し」の可能性をめくって 新垣誠・野村浩也 / 「沖縄」を語る過程を思考することの意義 島袋まりあ / 「抛り所」の不在から新たな記述遂行へ 金城正樹 / 空洞の埋まる日 知念ウシ

アメリカ・レポート 21世紀の人権運動20 警察官の暴行事件とレイシャル・プロファイリング 柏木宏

「人権」で読み解く江戸川柳 2 離婚女性のアジール東慶寺 2 田結荘哲治

映像フリースペース 「インソムニア」（クリストファー・ノーラン監督） 白井佳夫

やっぱり今この本を 28 『800』（川島誠著） 今江祥智 本の紹介

『アイヌときどき日本人』（宇井眞紀子写真集） / 『民族幻想論 あいまいな民族 つくられた人種』（スチュアート ヘンリ著）

映画『アリ』が伝えるもの 国代忠男

チェンジング・フェイスとの出会い 顔にアザやキズのある人でつくる当事者運動の国際交流 石井政之

もう「大きい」とは言わないで セクシュアリティを否定する「女らしさ」の社会規範 デイ多佳子

ホルモン奉行外伝 7 ニューヨーク篇 角岡伸彦

部落解放 508号（解放出版社刊，2002.10）：630円

特集 滞日・在日外国人と人権

「人権」で読み解く江戸川柳 3 三下り半に見る悲喜劇（1） 田結荘哲治

映像フリースペース 「命」（篠原哲雄監督） 白井佳夫

やっぱり今この本を 29 『にぎやかな湾に背負われた船』（小野正嗣著） 山下明生

本の紹介

『イルム なまえ だれもが本名で暮らせる社会を』（民族教育ネットワーク編） / 『差別のまなざしと解放へのあゆみ 三重の部落解放史』（中尾健次著） / 『人権教育への提案 義理・人情から人権へ』（アジア・太平洋人権情報センター編） / 『データで考える結婚差別問題』（奥田均著）

「同情」もいっしょにお買い上げいただきます 障がいのある人たちが働く喫茶コーナーの20年 うちこしまさよし

独立性と実効性ある人権委員会を「人権擁護法案」の抜本修正にむけて 谷元昭信

抑制のない高齢者ケアの実現をめざして 東野正尚 全国水平社創立をめぐる若干の問題 『水平社の原像』の批評に接して 朝治武

部落解放運動情報 66号（[部落解放運動・情報]編集委員会刊，2002.7.20）：300円

特集 「考察 差別糾弾闘争」

こんな本がでています 『新しいソーシャルワーク入門 ジェンダー、人権、グローバル化』（河野貴代美 杉本貴代栄編）

部落解放研究 146（部落解放・人権研究所刊，2002.6）：1,000円

特集 学力保障の課題とは何か

地域教育からみた学力問題 池田寛 / 社会的不平等と学力低下批判 学力保障をめぐる動向と課題に寄せて 長尾彰夫 / 人権教育における学力保障のフレームワーク 学力評価からのアプローチ 鍋島祥郎 / 自然をおそれうやまう子どもたちを 総合的な学習のすすめ 山口幸夫

2001年・夏、国連における「門地」差別の扱われ方 国連人権小委員会、世界会議（準備会合）、社会権規約委員会において 坂東希

部落問題に関する人権意識調査のあり方と「差別意識論」の課題 大阪府2000年調査の経験から（後編） 佐藤裕 グッドカンパニーフォーラム 「企業の社会的責任と社会的投資」報告 原由利子

書評 『奈良の被差別民衆史』（奈良県立同和問題関係史料センター編） 藤井寿一

部落解放研究 147（部落解放・人権研究所刊，2002.8）：1,000円

特集 全国水平社創立80周年

国民社会形成史のなかの水平運動 関口寛 / 大正期キリスト者の部落問題認識 田中和男 / 滋賀県における融和運動と地域社会 初期滋賀県昭会会の活動実践 吉村智

博

グローバル・コンパクトと日本 高島肇久
 見て、ふれて、学び合える地域の学校 教頭として進めてきた学校づくり 西久保信一
 教育コミュニティづくりの展開と課題 貝塚市立第2中学校区を事例として(下) 濱元伸彦,大田美穂子
 史料紹介 「相州鎌倉極楽寺村長吏類門帳」について 中尾健次
 書評 『水平社の原像 部落・差別・解放・運動・組織・人間』(朝治武著) 藤野豊
 部落解放ひろしま 59号(部落解放同盟広島県連合会刊, 2002.7): 1,000円
 特集 部落の中の子育て論議
 解放運動の人間像 4 社会関係と人間のありよう 小森龍邦
 日本文化の因習を考える 16 「仏教教団の因習・習俗」を問う射程 8 「坊守」とは 小武正教
 部落解放ひろしま 60号(部落解放同盟広島県連合会刊, 2002.9): 1,000円
 特集1 いのちと人権を危うくする有事諸法制
 特集2 公権力の権限を拡大する人権・メディア規制法案
 日本文化の因習を考える17 「日本教を問う」1 日本教という「自然主義」 小武正教
 部落解放史ふくおか 106号(福岡部落史研究会刊, 2002.6): 1,050円
 特集 ハンセン病と穢れ
 ハンセン病と仏教 遠藤和夫/前近代社会における「触穢」について 松下志朗
 向田をめぐる解放運動と民俗2 香月靖晴
 部落史に学ぶ 新たな見方・考え方に立った学習の視点 外川正明
 『写真記録 全国水平社』の読み方 宮武利正
 近世民衆史の泉 43 古文書学習会
 書評 『全国水平社を支えた人びと』(水平社博物館編)

田原行人

部落問題研究 160(部落問題研究所刊, 2002.6): 2,187円
 第39回部落問題研究者全国集会報告
 水平運動史研究の方法について 水平社創立をめぐって(その9) 鈴木良/全国水平社創立の地下水 朝治武/日本における市民社会形成の史的探究 広川禎秀
 部落問題研究 161(部落問題研究所刊, 2002.8): 1,111円
 特集 研究状況と課題
 身分的周縁論の系譜と方法 森下徹/現代人権論の課題 人たるに値する生存の確保 新谷一幸/人権教育の論点と課題 川辺勉/部落問題文芸研究の現状と課題 川端俊英
 穢れ観念と部落差別(上) その不可分性と穢れ観念の位置 峯岸賢太郎
 部落問題文芸作品発掘 その2 「草履」(島田和夫) 作品解題 秦重雄
 民権協ニュース 138(在日韓国民主人権協議会刊, 2002.5): 300円
 書籍紹介 『アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない 恥辱のあまり崩れ落ちたのだ』(モフセン・アフマルバフ著)
 民権協ニュース 139(在日韓国民主人権協議会刊, 2002.6): 300円
 書籍紹介 『戦争とプロパガンダ』(E・W・サイド著)
 民権協ニュース 140(在日韓国民主人権協議会刊, 2002.7): 300円
 書籍紹介 『百年の愚行』(Think the Earthプロジェクト刊)
 Rights ライツ 40(鳥取市人権情報センター刊, 2002.9)
 今月のいちおし! 『ぼくを探しに』(シルヴァスタイン作) 椋田昇一

新聞書評欄等 (2002年7月~9月受入)

~各新聞から書評・映画評・VIDEO評等をピックアップしました~

解放新聞 2076号（解放新聞社刊，2002.7.8）：80円
映画「イン・ザ・ベッドルーム」（トッド・フィールド監督）

今週の1冊 『日本の近代思想』（鹿野政直著）

解放新聞 2077号（解放新聞社刊，2002.7.15）：80円
今週の1冊 『民族幻想論 あいまいな民族 つくられた人種』（スチュアートヘンリ著）

解放新聞 2079号（解放新聞社刊，2002.7.29）：80円
今週の1冊 『戦争と平和 アニメージュ叢書』（富野由悠季著）

山口公博が読む今月の本

『宮中歳時記』（入江相政編）／『米軍と農民 沖縄県伊江島』『命こそ宝 沖縄反戦の心』（阿波根昌鴻著）／『戦争の日本近現代史』（加藤陽子著）

解放新聞 2082号（解放新聞社刊，2002.8.19）：80円
住基ネットの問題点・斎藤貴男さんに聞く1

本の紹介 朝治武

『写真記録全国水平社』（部落解放同盟中央本部編）／『新版水平社の源流』（水平社博物館編）／『全国水平社を支えた人びと』（水平社博物館編）／『近代日本と水平社』（秋定嘉和・朝治武編著）／『水平社の原像』（朝治武著）

解放新聞 2083号（解放新聞社刊，2002.8.26）：80円
映画「プロミス」（ジャスティーン・シャピロ，B.Z.ゴールドバーク監督）

住基ネットの問題点・斎藤貴男さんに聞く（2）

解放新聞 2084号（解放新聞社刊，2002.9.2）：120円
住基ネットの問題点・斎藤貴男さんに聞く（終）

解放新聞 2085号（解放新聞社刊，2002.9.9）：80円
今週の1冊 『暴走する世界 グローバリゼーションは何をどうかえるのか（アンソニー・ギデンズ著）』

解放新聞 2086号（解放新聞社刊，2002.9.16）：80円
今週の1冊 『小泉改革と監視社会』（斎藤貴男著）

解放新聞 2087号（解放新聞社刊，2002.9.23）：80円
今週の1冊 『雲出づるところ』（土田世紀著）

解放新聞 2088号（解放新聞社刊，2002.9.30）：80円
今週の1冊 『人権教育の新しい地平へ』（谷口研二著）

山口公博が読む今月の本

『ちいさなきいろいかさ』（にしまきかやこイラスト・もりひさしシナリオ）／『無文字社会の歴史 西アフリカ・モシ族の事例を中心に』（川田順造著）／『長距離

走者の孤独』（アラン・シリトー著）

解放新聞改進黨 296号（部落解放同盟改進黨支部刊，2002.6.20）

私の本棚150 『歴史の中で語られてこなかったこと おんな・子供・老人からの「日本史」』（網野善彦，宮田登著）古川博士

解放新聞改進黨 297号（部落解放同盟改進黨支部刊，2002.7.20）

私の本棚151 『男を磨く酒の本』（斉藤茂太著）松田敏明

解放新聞改進黨 298号（部落解放同盟改進黨支部刊，2002.8）

私の本棚152 『「正義」を叫ぶ者こそ疑え』（宮崎学著）柳生雅巳

解放新聞東京版 552号（解放新聞社東京支局刊，2002.7.15）：90円

東京の部落の歴史 3 『非人出入一件』その1 弾左衛門支配体制確立をめざす六代集村 浦本誉至史

解放新聞東京版 553号（解放新聞社東京支局刊，2002.8.1）：90円

東京の部落の歴史 4 『非人出入一件』その2 非人頭の自信と弾左衛門の逆襲 浦本誉至史

解放新聞東京版 554号（解放新聞社東京支局刊，2002.8.15）：90円

東京の部落の歴史 5 『非人出入一件』その3 訴訟再開 弾左衛門と二つの決定的証拠 浦本誉至史

解放新聞東京版 555号（解放新聞社東京支局刊，2002.9.1）：90円

東京の部落の歴史 6 『非人出入一件』その4 弾左衛門集村の「栄光」と憂鬱 本当の後日談 浦本誉至史

解放新聞東京版 556号（解放新聞社東京支局刊，2002.9.15）：90円

東京の部落の歴史 7 『浅草新町と江戸の被差別民衆』その1 弾左衛門囲内＝浅草新町、被差別民の街 浦本誉至史
なら解放新聞 689号（奈良県部落解放同盟支部連合会刊，2002.6）：140円

摂食障害って何やる 15 すー。

なら解放新聞 690号（奈良県部落解放同盟支部連合会刊，2002.7.25）：140円

摂食障害って何やる 16 すー。

シンポジウム

『京都の部落史』教材化に向けて なぜ・何を・どう教えるのか

京都部落問題研究資料センターの前身である京都部落史研究所は、京都における部落の歴史を明らかにするため、長年の調査研究を元に、『京都の部落史』全10巻を刊行しました。その成果を教育の現場でも生かしていただきたいという願いもこめて、今春には、部落史連続講座「『京都の部落史』教材化のために」を開催し、全国より毎回数十人の熱心な参加者をえて、成功裏におわりました。

しかし、新しい部落史研究の成果を教育に生かすというのは、被差別部落の起源を江戸時代から中世に遡らせるといふ新しい知見の取り込みだけに終わるものではありません。ここで、あらためて「部落史」を授業で教えることの意味を考え、本当に教える必要があるのか、なぜ教えるのか、そして必要があるとするならばどの年齢の子どもに何をどのように教えるのかを根本的に問い直さなくてはならないのではないのでしょうか。

そのための企画として、標記のシンポジウムを開催します。パネリストの報告をもとに、新しい同和教育のありかたについて考えていきましょう。この問題にご関心をお持ちの皆さんの積極的な参加をお願いします。

日 時：11月9日（土） 午後1時30分～4時

パネリスト：外川 正明（京都部落問題研究資料センター運営委員）
灘本 昌久（同資料センター所長・京都産業大学助教授）

コーディネーター：伊藤 悦子（同資料センター運営委員・京都教育大学助教授）

場 所：京都府部落解放センター2階 実習室

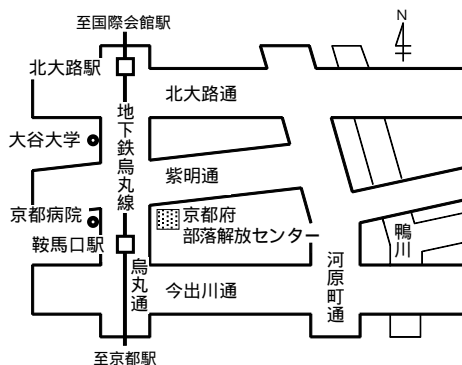
資 料 代：500円

主 催：京都部落問題研究資料センター

参加希望の方は当資料センターまで電話・FAX・電子メールでご連絡ください

Memento 10

発行日 2002年10月25日 / 編集・発行 京都部落問題研究資料センター



所在地 〒603-8151
京都市北区小山下総町5-1
京都府部落解放センター3階

TEL/FAX 075-415-1032

U R L <http://www.asahi-net.or.jp/qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時
(祝日・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩2分